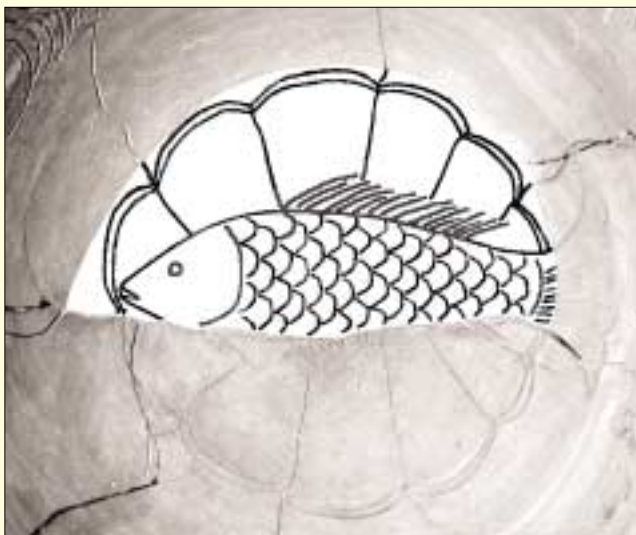




▲椀の形と側面の線刻



▲魚の復元（白い部分）

平成12年に行った井ノ内朝日寺の特別養護老人ホームの発掘調査では、土器の内外面に魚・鳥・雲などを線刻した平安時代前期の須恵器椀が出土しました。直径約30センチ、高さ約12センチの大型品で、焼成時に焼き割れて少しゆがんでいます。

線刻は、先のとがったヘラなどで土器や瓦に文様や記号、文字などを彫ったものです。同時期の須恵器や緑釉陶器、灰釉陶器には、花文が多く用いられています。このように多彩な構図が巧みに、大らかに表現されたものは珍しいでしょう。

椀は、底の部分が半分欠けていて、外面に線刻した絵柄については不明です。内面は、底全体に蓮華文風の葉とつる草がのびる様子を図案化しており、中央には魚が横たわっています。尾びれと尻びれ、腹びれ、胸びれが表現されています。側面は、S字形に大きな立つ波が岸に打ち寄せる場面を3組描き、その中に飛ぶ鳥が2羽、とまる鳥が6羽います。外面は、サルノコシカケ科のキノコの形に似た靈芝雲が3組描かれています。

このような線刻の図案は、奈良東大寺に伝世された正倉院宝物の家具調度や文具などに見ることができます。目出たいしるし、良い兆しを表す吉祥文様としてよく用いられたようです。魚形も中国に起源があり、奈良時代の官人が腰の飾りとして帯に吊り下げたといわれています。魚の線刻は尾びれが強調されています。鯉の滝登りのいわれとなった登竜門の故事にちなんでコイ科の仲間に見立てています。